



新しい出会いに感謝して

新しい年を迎えました。
 新年度、新社会人、新学年…。「新しい」ということはとても楽しみなことですが、一方ではこれからのことを思い、不安を感じる方もおられるのではないのでしょうか。
 私も4月から新しい部署で仕事をしています。まだまだ戸惑うことも多くあり、立ち止まりそうになることも…。
 教育委員会人権教育課では毎年、地域の皆さんと一緒に「町(区・集落)別人権学習会」を実施しています。人権を正しく学び、その大切さを知っていただきたい思いで、さまざまな人権課題について啓発DVD鑑賞や講演会を開催しています。
 「人権は難しく堅苦しそう。何をするのか不安」と学習会への参加に二の足を踏む方がいらっしゃるかもしれません。しかし、実際参加された方からは「新たな学びがあった」「初めて

の方とお話できてよかった」「一人暮らしなので久しぶりに皆さんとお会いできてうれしかった」などのお言葉もいただいています。少し勇気を出して学習会に参加することで、自分にとってプラスになる新しい経験をしていただけます。多くの皆さんのご参加をお待ちしています。
 さて、立ち止まりそうな私には…。新たに出会った地域の方や仲間が、そっと手を差し伸べてくれます。生きていくには人と人とのつながりが大切であると改めて感じつつ、新しい年を迎えています。マザー・テレサの言葉に「愛の反対は憎しみではなく無関心である」というものがあります。人権を難しいものと捉えず、そばにいる人に関心を持ちたい、そっと手を差し伸べられる自分でありたいと思います。



西村家の先祖を祭るお社



西村伝入齋の墓



▼問合せ 郷土資料館(☎23-5992)
 西村伝入齋は、池田輝政が姫路城主として播磨一國を治めていた慶長9(1606)年に、加東郡滝野村の阿江与助と共同で、西脇市北端の加古川と篠山川の合流点から下流の滝野までを開削した人物です。この功績により田高船座の元締めを許され、往来する高瀬舟やかだから五分一銀を徴収する権利を与えられ、運上銀を領主に上納しました。西村家の船座支配はその後、池田、本多、幕府領と領主交代の間も引き継がれ、寛文5(1665)年まで続きました。
 また、江戸時代で早い時期に新田開発を行った人物で、土豪的性格を持った有力な農民であり、船町の新田10石余の開発も行っています。

西村伝入齋の墓(黒田庄町船町)

ふるさとの魅力再発見ーにしわき歴史探訪

パブリック・コメント

ご意見をお寄せください

第2期日本のへそ西脇農業ビジョン



日本のへそ西脇農業ビジョンは、西脇市における農業の基本的な方針や施策などを体系的に整理したものです。農業者や関係機関、団体が連携して農業を持続的なものとするため、農業全体を再構築し、本市の「食」と「農」の分野の方向性を示しています。

市は平成26年にビジョンを策定し、それに基づきながら農業振興を推進してきました。このたび、農業を取り巻く情勢変化を踏まえながら、本市農業を持続可能なものとするための改定を行うに当たり、市民の皆さんからご意見を募集します。

- ▶募集期間 1月1日(月・祝)~31日(水)
- ▶閲覧場所 農林振興課・情報公開コーナー(市役所内)、図書館(みらいえ内)、市ホームページ
- ▶意見の提出方法 任意の様式で持参、郵送、ファクスまたはメールで下記へ(住所、氏名や団体名、電話番号を明記)
- ▶意見の提出先・問合せ 〒677-8511 西脇市下戸田 128-1 西脇市農林振興課 ☎22-3111(内線2034) FAX 22-6987 ✉nourin@city.nishiwaki.lg.jp



みんなでまちづくりー市民の皆さんのまちづくり活動ー

各地域に「人のいる図書室」をつくりたい

市民提案型まちづくり事業採択団体の紹介

ブック人・言葉・むすBookは、本や人を通してみんなが楽しく心豊かに暮らす地域づくりを目指しています。



昨年11月には元NHKアナウンサー村上信夫さんの「嬉しいことばが地域を変える」をテーマにした講演会を開催し、参加した約50人が“ことば”や“コミュニケーション”について考えるきっかけとなりました。



今後は図書館から離れたところに住む市民でも気軽に利用することができる「人と触れ合える図書室」を各地域につくり、本を通して人と交流する場を提供しようと活動しています(21㉔に関連記事)。

西脇の自然 598

ヤブコウジ

さくらそう科



常緑小低木で、名前の「藪柑子」は「藪に生える柑子(ミカンの一種)」です。生える場所と果実の形にちなんで名付けられたようで、市内では雑木林などでよく見かけます。

ヤブコウジという名前より、お正月の縁起物「十両」の別名で寄せ植えなどで販売されているものといえば、イメージが浮かぶ方も多いのではないのでしょうか。

人間との関わりが深い本種は、古くは「山橘」といい、万葉集で歌が詠まれています。江戸時代から明治時代までは非常に栽培が盛んであったらしく、200もの品種があったようです。野生では1、2個の実しか付けないことが多いですが、真冬の雑木林でそんな赤い実を見つけるとうれしくなります。

【西脇市動植物生態調査研究グループ】